

フリーテキスト講座

～固定資産(売却)－②～ 全4枚



Morisato

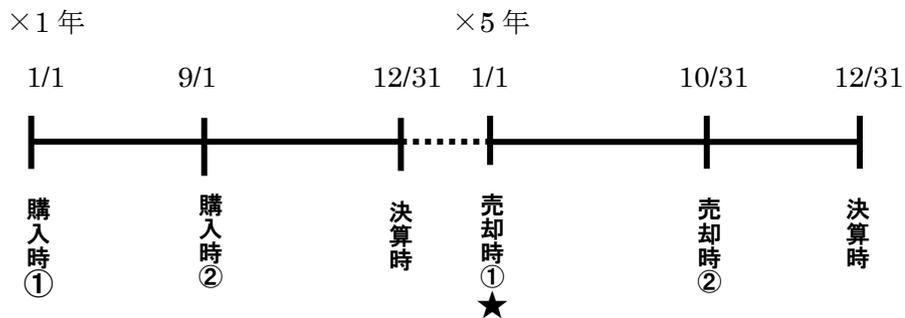
弥生カレッジ GMC フリーテキスト講座(無料動画で公開中)

◆売却

売却にはいる前に、もう一度これまでの流れを復習しておきましょう。

法人

会計期間：1月1日～12月31日



ではまず、×1年の期首に【購入】した建物を×5年の期首に【売却】したとすれば、どのようになるかを確認していきましょう。

～×1年 期首に購入した固定資産を期首に売却するとき～

【例】×5年 1/1 当社は、×1年の 1/1 に購入した建物(取得原価 820,000 円 減価償却の累計額 147,600 円 残存価額 10%、耐用年数 20 年、定額法)を、700,000 円で売却し、代金は現金で受取りただちに当座預金に預け入れた。

間接法		
建物	減価償却累計額	
820,000	36,900	←×1年
	36,900	←×2年
	36,900	←×3年
	36,900	←×4年

×1年～×4年までの、決算時に毎年減価償却をしており「建物」勘定から「減価償却累計額」勘定を使って間接的にマイナスをしているということですね。

間接法で記帳を行っており、今回のように売却をしたということは、建物という資産が手元から無くなるので、仕訳にすると…

間接法

減価償却累計額	147,600	建物	820,000
当座預金	700,000	固定資産売却益	27,600

では、今度は逆に売却したが「損」をしてしまった時は、どのように処理をするのでしょうか？
仮に、売却価額が650,000円だったとしましょう。(仕訳だけのせませす。)

減価償却累計額	147,600	建物	820,000
当座預金	650,000		
固定資産売却損	22,400		

※売却価額と帳簿価額の差額は「固定資産売却益」「固定資産売却損」になります。

「減価償却累計額」という勘定科目は、本試験では「建物減価償却累計額」や「備品減価償却累計額」という勘定科目になっていることもあります。

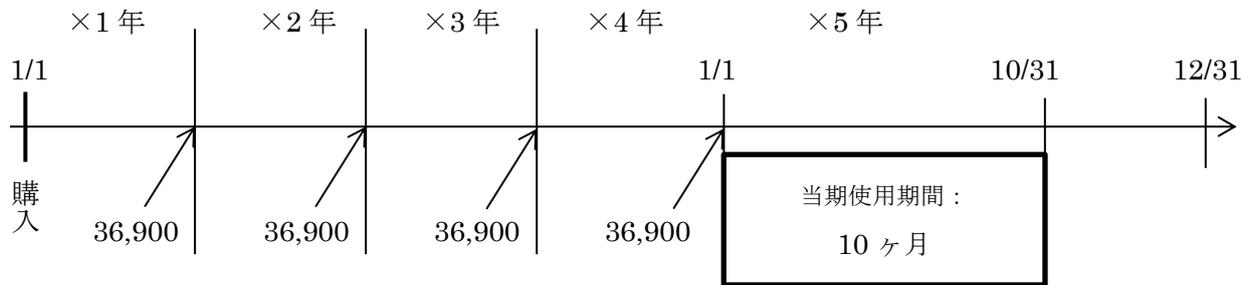


では、最後に期中に売却をした場合…を確認しましょう！あと少しなので頑張って下さい！

～×1年 期首に購入した固定資産を期中に売却するとき～

【例】×5年 10/31 当社は、×1年の 1/1 に購入した建物(取得原価 820,000 円 減価償却の累計額 147,600 円、残存価額 10%、耐用年数 20 年、定額法)を、700,000 円で売却し、代金は現金で受取りただちに当座預金に預け入れた。

期中に売却しているということは…当期首～10ヶ月間は使用しているということですね？



と、いうことは…当期も 10 か月間は固定資産を使用しているのので、使った分の減価償却費を月割計算して計上しなければいけません。

1年分の減価償却費：820,000 円×0.9÷20年＝36,900 円／年

当期分の減価償却費：36,900 円× $\frac{10 \text{ヶ月}}{12 \text{ヶ月}}$ ＝30,750 円／10ヶ月分

では、仕訳を確認しましょう。

間接法			
減価償却累計額	147,600	建物	820,000
減価償却費	30,750	固定資産売却益	58,350
当座預金	700,000		

では、今度は逆に売却したが「損」をしてしまった時は、どのように処理をするのでしょうか？
仮に、売却価額が 620,000 円だったとしましょう。

減価償却累計額	147,600	建物	820,000
減価償却費	30,750		
当座預金	620,000		
固定資産売損	21,650		

期中売却の仕訳の方法は、2級につながる処理方法です。
最初は慣れないと思うので、同じ問題でいいので答えを見ながら
繰り返し解いて、確認していこう。



*平成 31 年（2019 年）度以降の日商簿記検定試験出題区分の改定により、「直接法」は日商 2 級の範囲となりました。